

喪失の諸変奏 — *A Pale View of Hills* —

池 園 宏

序

Kazuo Ishiguro の第一作目の長編小説 *A Pale View of Hills* (1982) は、Royal Society of Literature より Winifred Holtby Memorial Prize を受賞するなど、出版当初から高い評価を受けてきた。この小説の執筆動機に関して、イシグロは自らの中にある日本の記憶を留めるためであったと述べている。

This very important place called Japan which was a mixture of memory, speculation, and imagination was fading with every year that went by. I think there was a very urgent need for me to get it down on paper before it disappeared altogether.¹

作品の舞台はイシグロの故郷と同じ長崎である。長崎に生まれ、5歳の頃に父親の仕事のため家族でイギリスに移り住んだ彼は、後年に至るまで郷里の地を踏むことはなかった。イシグロにとっての日本は長崎を意味しており、² 本人の中にある「記憶と推測と想像の混合物」としての故郷の情景が、本作品の大きなバックボーンをなしている。Brian W. Shaffer は本作品のタイトル *A Pale View of Hills* の意味について、小説に登場する実際の山並みの遠景自体というより、"the faded view, dim perception, or distant memory of [the distant hills]"³ を指すと述べているが、イシグロの上記発言を考え合わせれば、この淡く消えゆく遠い記憶は、彼自身の故郷に対する記憶とも重なるものであろう。

このような故郷の原風景を前景化した本作品において、イシグロは物語中の時代を二重に設定した。一つは作者の実際の執筆時点に近い1980年前後、他方は時代を遡って第二次世界大戦後の1950年代初頭である。主人公兼語り手の Etsuko は、現時点からフラッシュバックの手法で遠い過去を

振り返り、戦後まもない時代の記憶を紡いでいく。イシグロはこの作品を皮切りに、以降の作品においても、過去や記憶というテーマを継続的に追求している。とりわけ第二次世界大戦前後の時代は、第二作 *An Artist of the Floating World* (1986)、第三作 *The Remains of the Day* (1989)、第五作 *When We Were Orphans* (2000) など、多くの作品の舞台背景となっている。イシグロがこの時代を選ぶのは、自身が "I am drawn to periods in history where more values in society have undergone a sudden change"⁴ と語るように、歴史上における価値観の転換期に興味を引かれるからである。

以上のような空間と時間の設定を持つ本作品では、当然のことながら戦争の名残がところどころにクローズアップされている。とりわけ原爆がもたらした惨状は、"But then the bomb had fallen and afterwards all that remained were charred ruins"⁵ という短い描写に端的に示されている。戦争は多大な損害や喪失をもたらす。それは国家や民族といった大きな枠組みのみならず、個人や個人を取り巻く人間関係にも当てはまる。この小説においてイシグロは表立った戦争批判を行うことを執筆の目的としてはいない。確かに、エツコの義父であり元学校長である Ogata-San が当時行った愛国主義的教育が、戦後になって次世代の批判にさらされる様子は鋭敏に描き出されている。しかし、本作品でイシグロが主たる視線を向けるのは、そのような直接的に戦争責任を負った特別な人間ではなく、むしろ市井の平凡な人々、とりわけ主人公エツコを始めとする多様な女性たちの姿である。大きな歴史の中では埋没しがちな、しかし戦後の時代を自分たちなりのやり方で生きようと模索する女性たちの日常の人間模様を、イシグロは細部に至るまで淡々とした筆致で描き出す。そして以下に論じるように、この小説では、これらの人物たちが時代の影響を直接間接に受けながら、様々な形で喪失を経験していく姿が描き出される。本論考では、*A Pale View of Hills* に見られる喪失の諸相に焦点を当て、それに翻弄されたり、逆にそれを誘発したりする人間像、およびその主題に込められた意味について考察したい。

I

論を始めるにあたり、まずはエツコの母の親友だった Mrs Fujiwara について考察することが有用だと思われる。フジワラ夫人は登場する場面こそ少ない副次的な人物ではあるものの、喪失というテーマを議論する上で重要な役

割を担っているためである。フジワラ夫人は長男を除く家族全員を原爆により喪失している。この意味で、彼女は戦争によって実質的な被害を受けた人間の一人として提示されていると言えよう。夫人の特質として着目したいのは、人生に対するその能動的な姿勢である。周囲の予期に反して、彼女は身内をなくした逆境に屈する素振りを見せようとしない。むしろ、自己の喪失状態から懸命に脱却しようと試みているかのような姿勢を示す。戦後、彼女は新たに繁華街の横丁のうどん屋で働くことにより、生計を立てている。エツコの友人 Sachiko は、そのような夫人を "a woman with nothing left in her life" (122) と形容し、すべてを剥奪された哀れな人間である事実を指摘する。また、オガタさんは、長崎でひとかどの人物だった夫を失ったフジワラ夫人の凋落ぶりを気の毒に思う。しかし、夫人の前向きな生き方を日頃から評価するエツコは、両者に対して反駁し、彼女のことを弁護している。

フジワラ夫人のポジティブな生き方を象徴するのは、彼女に関して繰り返し使用される "look forward" というフレーズである。夫人はエツコに対し "You've everything to look forward to now, Etsuko" (77) と言って勇気づけ、後日エツコは "Mrs Fujiwara always tells me how important it is to keep looking forward" (111) と回顧する。このエツコの言葉は、原爆で焼け野原となった一帯を眺めた際に発せられたものである。これに続けてエツコは、夫人が主張するように人々が「前向きでい続ける」ことがなければ、ここは依然として瓦礫のままだろうと述べる。彼女の中では、フジワラ夫人の姿勢と戦争からの復興の機運とが重ねられているのだ。さらにエツコは、"Whenever I see her, I think to myself I have to be like her, I should keep looking forward. Because in many ways, she lost more than I did" (111) と述べる。ここにあるのは、夫人の前向きな姿勢の背後には戦争による喪失の実態があるという認識、ならびに彼女の能動的な姿勢への称賛の念である。このような夫人について、Yu-Cheng Lee は、"she is representative of a forward-looking spirit concomitantly found amidst the despair and forlornness of postwar Nagasaki"⁶ と的確な指摘をしている。

フジワラ夫人がエツコに対してとりわけ力説するのは、子供を出産することの重要性である。作品中エツコは、初の出産を控えた母親としての不安感 "misgivings about motherhood" (99) を隠せずにいる心境を何度か告白している。これに対し夫人は、"You must keep your mind on happy things now. Your child. And the future" (24)、"A mother . . . needs a positive attitude to bring up a child" (24-25) というように能動的な助言を繰り返し

口にし、エツコに大きな影響を与えている。夫人の発言について、それが単に先輩格の母親による思いやりに満ちた訓示だと捉えるだけでは不十分であろう。夫人は、あらゆるものが破壊された戦後の状況にあって、新たな生命を授かる子供に未来の幸福への期待を寄せているのだ。彼女にとって子供は喪失からの復興や新生の象徴として映っているのだと解釈できる。

この事実は、フジワラ夫人が墓地で毎週見かけるといふ若い妊婦とその夫に対する言及にも表れている。彼らについて夫人は、"But they should be thinking ahead now. That's no way to bring a child into the world, visiting the cemetery every week" (25) と批判的な発言をする。ここには、戦争で生命を奪われ永眠する人間と、戦後新たに誕生する人間とのコントラストが認められる。さらに興味深いのは、その直後、彼女が生き残った息子 Kazuo のことに触れ、"It's time he started looking ahead too" (25) と発言している点である。"thinking ahead" や "looking ahead" という言葉が連続して用いられているのは決して偶然ではない。当然のことながら、これらは先の "look forward" という言葉と強く響き合う。後日フジワラ夫人は、再び結婚相手を探し始めた息子について、"He said once he'd never marry again, but he's starting to look ahead to things now. He has no one in mind as of yet, but at least he's started to think ahead" (151) と述べているが、この場面でも同じキーフレーズが用いられている点は看過できない。カズオは成人男性であり、幼い子供ではないものの、夫人にとっては自らが生命を宿した愛息である事実には変わりはない。家族を喪失した中で唯一生き残った息子の未来に対する期待は、新たに生まれてくるエツコの子供に対する期待と同一線上にあると解釈できるのだ。

II

喪失からの復興や新生の可能性を子供が象徴的に担うとすれば、主人公エツコの出産後の子育てがどのように描かれているかが次なる議論の焦点となる。この視点から見た場合に重要な本作品の特徴は、物語の冒頭でエツコの長女 Keiko の死がいきなり示されることである。ケイコが7歳の頃、エツコは夫の Jiro と離婚することとなった。その後、イギリス人の Sheringham と再婚した彼女は、ケイコを連れてイギリスに移り住んだ。その後エツコはシェリングガムとの間に Niki という次女を生む。ケイコは、物語の現時点から8、9年前に寝室に引きこもるようになり、6年前にはついに家を出るに

至った。そしてごく最近、住んでいたマンチェスターの部屋で首吊り自殺を遂げたのである。読み手は小説冒頭で子供の喪失に直面する母親エツコの姿に遭遇させられることになるわけだが、この悲劇的なプロット設定はいかなる意味を持つのだろうか。

物語開始から原著でほんの3ページ進んだ時点で、"I have no great wish to dwell on Keiko now, it brings me little comfort" (11) という意味深な発言をしてケイコへの言及を止めたエツコは、現時点の語りを中断して、戦後の数週間つきあいがあった友人サチコの回想へと移行する。エツコの記憶の中でサチコ存在は特異な地位を占め、過去の回想話の大部分はこの奇妙な友人との関係を巡って展開されている。エツコ自身は明確に認識していないように書かれているが、イシグロ自らがあるインタビューで解説しているように、彼女はサチコを通して、実際は自分自身のことを語っているのである。

What I intended was this: because it's really Etsuko talking about herself, and possibly that somebody else, Sachiko, existed or did not exist, the meanings that Etsuko imputes to the life of Sachiko are obviously the meanings that are relevant to her (Etsuko's) own life. Whatever the facts were about what happened to Sachiko and her daughter, they are of interest to Etsuko now because she can use them to talk about herself. So you have this highly Etsuko-ed version of this other person's story⁷

このイシグロの説明を土台にして、Cynthia F. Wong は "Sachiko's character serves as a *doppelgänger* or spectral double to Etsuko's as one way to show how people move through loss and death"⁸ という解説をしている。エツコとサチコは「分身」であるがゆえに、エツコが描き出すサチコ像を検証することは、エツコの生き方、とりわけケイコの「喪失と死」への処し方を浮き彫りにすることに繋がると考えられる。

さらにイシグロは、同じインタビューで、この作品の中心にあるエツコの罪悪感について言及している。

Yes, the book is largely based around her guilt. She feels a great guilt, that out of her own emotional longings for a different sort of life, she

sacrificed her first daughter's happiness.⁹

これをもとに作品を解釈すれば、エツコは自己の人生の願望を実現させるため、ケイコの人生を犠牲にしたエゴイスティックな人間だということになる。しかし、小説中でその具体的な経緯や自殺への因果関係が明らかにされることはない。それは、いわゆる「信頼できない語り手」であるエツコが、"the language of self-deception and self-protection"¹⁰を用いて語っているためである。しかし、エツコの心理や行動は彼女が描き出すサチコの姿を通して間接的に浮かび上がる、というプロット上の仕掛け施されている。ここで重要となるのは、サチコの幼い娘 Mariko の存在である。エツコとサチコが分身であれば、各々の娘ケイコとマリコも同じくパラレルな関係をなすと考えるのが自然であろう。以降、サチコとマリコの親子関係、ならびに、そこに自分とケイコとの関係をオーバーラップさせるエツコの心理を分析することにより、ケイコ喪失の要因と意味を明らかにしていく。

エツコが懸念しつつも強い興味を引かれるのは、連れ合いのアメリカ人 Frank とともに日本を離れ、アメリカへの移住を画策しようとするサチコの独自の生き方である。この生き方は、後にイギリス人と再婚し、彼の祖国に渡るエツコのそれと重なるものである。このため、彼女はその先駆者たらんとするサチコとの、はたから見れば奇異なほど近い関係を回想していくのだ。サチコの噂話をする隣人たちは、フランクのようないかかわしい "American friend" (13) とのつきあいについて陰口をたたく。サチコは自らの行動について、"there's nothing I'm ashamed of" (37) (38)、"I've nothing to be ashamed of" (71) というように、エツコに対して何度も自己弁護する。これは、サチコの言葉を借りて、エツコが後年の自身の行動を正当化しているのだと解釈することができるだろう。この自己正当化は、"My motives for leaving Japan were justifiable, and I know I always kept Keiko's interests very much at heart" (91) というエツコの言葉に如実に表れている。常にケイコのためを思っていたというエツコ的心情は、マリコに対するサチコの姿勢にそのまま重なっている。サチコは事あるごとに、母親として娘の幸せを第一に考えていると主張する。一例を挙げよう。

Etsuko, I've told you many times, what is of the utmost importance to me is my daughter's welfare. That must come before everything else. I'm a mother, after all. I'm not some young saloon girl with no regard

for decency. I'm a mother, and my daughter's interests come first." (86)

最後の "my daughter's interests" が、先ほどのエツコと似た言い回しである点に着目したい。プロットの順序を考えると、エツコは上記サチコの発言を聞いたエピソードを回想した後、現時点に戻って "Keiko's interests" に言及している。つまり、エツコの自己正当化は、サチコの主張の影響を強く受けていると解釈できるのである。

だが結局のところ、この二人の母親の生き方は、娘という他者を代償にしつつ、自己の願望の実現を優先させるものに他ならない。二人の娘はいずれも、母親の選んだ外国人の父親の受け入れを拒絶する。マリコはフランクに対する嫌悪感をあらわにし、エツコに対して、"He's a bad man" (81)、"Frank-San pisses like a pig. He's a pig in a sewer. . . . He drinks his own piss and he shits in his bed" (85)、"I don't want to go away. And I don't like him. He's like a pig" (172) と執拗に訴える。ケイコと父シェリングムの関係に関しては、例によって、エツコの語りにより提供される情報は乏しい。だが、たとえば、ケイコがシェリングムの葬式に出席しなかったという事実や、"He ignored her most of the time" (175) という次女ニキの発言は、両者の隔絶した関係を自ずと物語っている。サチコとマリコ親子の話を通してエツコが自分とケイコのことを語っているという点を考えれば、マリコの罵詈雑言は、実際はケイコの言葉だったのかもしれないという可能性すら考えられるのだ。

このような子供の意向に逆らってまで、母親たちが新たな将来を模索するのはなぜだろうか。エツコがイギリス人と結婚しイギリスに移住した理由は明らかにされていないが、一方、サチコの理由は以下の主張に明示されている。

Mariko will be fine in America, why won't you believe that? It's a better place for a child to grow up. And she'll have far more opportunities there, life's much better for a woman in America. . . . She could become a business girl, a film actress even. America's like that, Etsuko, so many things are possible. Frank says I could become a business woman too. Such things are possible out there. (46)

And Mariko would be happier there. America is a far better place for

a young girl to grow up. Out there, she could do all kinds of things with her life. She could become a business girl. Or she could study painting at college and become an artist. All these things are much easier in America, Etsuko. Japan is no place for a girl. What can she look forward to here? (170)

サチコの主張は、アメリカ行きがマリコの将来の人生に寄与するということが一貫している。だが、この二つの引用にはある共通点が見られることに着目したい。それは、いずれもマリコを主語にして始まった主張が、途中で "a woman" "a young girl" "a girl" という一般化された形に移行しているという点である。サチコは娘のためと言いながら、実は自己の願望を吐露していると解釈できるのではないだろうか。その願望は、一つ目の引用中の「私だって女性実業家になれるとフランクが言っている」という一言に凝縮されている。もちろん、マリコに対するサチコの愛情自体は否定されるものではないだろう。だが、これらの発言には、"my daughter's interests" が一番であるという信念とは裏腹に、自らの自己実現こそが第一の優先事項と化している一人の女性像が認められるのだ。また、二つ目の引用の最後で、サチコが "look forward" という言葉を用いている点も見逃せない。主語の "she" はマリコとも一般的な女性とも読めるが、ここには、旧態依然とした日本の風土にポジティブな側面を見出せないサチコ自身の脱出願望が窺える。先述した長崎の焼け野原を眺める場面で、サチコとエツコはフジワラ夫人の前向きな生き方に関して意気投合し、"look forward" "keep looking forward" といったキーフレーズを、原著わずか2ページの中で計8回も繰り返している (111-12)。フジワラ夫人の姿勢が喪失状態からの復興や新生を象徴する子供と関連していた点を想起すれば、子供よりもむしろ自らの願望を優先するサチコの「前向き」な姿勢は、夫人とは対極的なものとも言える。さらに付け加えれば、サチコの上記二つの発言はどちらも、彼女のアメリカ行きを心配するエツコの問いかけをきっかけに誘発されている点は見逃せない。エツコはサチコを通して自分のことを語っているのだから、エツコの心配は、娘をイギリスに連れていこうとする際の自分自身に向けられていたものと同じはずである。エツコはサチコの決断を回想するプロセスによって、自身がケイコをイギリスに同行させる際の不安を払拭する、ひいては自らの決断の正当性を確認する作業を行っている」と解釈できるのだ。

III

このような母親の自己本位な発想が子供にネガティブな影響をもたらすのは自明である。今度はパラレルをなす娘ケイコとマリコに焦点を当て、喪失という観点から具体的に考察してみたい。ケイコがどのような原因で家出し自殺に至ったかについて、エツコは直接的に詳しく語ることをしない。だがそれを知る手がかりは、やはりサチコの発言に見出せる。交際していたフランクがいったん消息不明となり、アメリカ行きの夢に陰りが見えた際、サチコがいつにない調子でマリコへの気遣いを示す場面がある。

As a matter of fact, Etsuko, I'm rather glad things have turned out like this. Imagine how unsettling it would have been for my daughter, finding herself in a land full of foreigners, a land full of Ame-kos. And suddenly having an Ame-ko for a father, imagine how confusing that would be for her. Do you understand what I'm saying, Etsuko? She's had enough disturbance in her life already, she deserves to be somewhere settled. It's just as well things have turned out this way.
(86)

仮定法を用いて示されたサチコのこの懸念こそ、まさに後年現実と化すエツコの娘の惨状を説明するものだと解釈できる。「アメ公」をイギリス人に読み替えれば、この発言は、母親の離婚という「動揺 (disturbance)」を経験していたはずのケイコに、イギリス移住という「不安な (unsettling)」状況と、イギリス人の父の出現という「混乱した (confusing)」状況が新たに生じた事実を示唆している。サチコの言葉に対し、エツコは "I murmured something in assent" (86) と反応している。この反応を回想して語っているのは、すでに娘を失っている現時点でのエツコである。彼女の不明瞭な同意の様子からは、ケイコの死の原因が自らにあったという自責の念が間接的に読み取れるのではないだろうか。エツコは娘を喪失した被害者ではなく、むしろ喪失を誘発した加害者なのだとと言える。エツコは成人した娘の家出に際して示した自己の態度について "regret" (88) を感じると述べるが、彼女の後悔はさらに遡った遠い過去に向けられるべきものである。

一方、ケイコとは異なり、マリコが死に至ったか否かについては小説中に言及されていない。しかし、マリコを巡っては死を連想させるイメージが重

層的に付与されている。そのイメージを醸し出すのは、作品中に繰り返し登場する川と木に関する不気味かつ不吉な描写の数々である。

まず、川と死の関係について具体的に見てみよう。エツコがマリコと初めて会話した川岸で、マリコの足元を心配したエツコは "You'll fall into the water" (16) と警告を発している。後日マリコは行方不明となり、やはり川岸で倒れているところを発見される。その姿を見たエツコは "at first I thought she was dead" (41) と語る。また、マリコは自分の前に現れて自分を連れ去ろうとする女の存在に何度か言及する。サチコによれば、それはマリコが5歳のとき東京で目撃した女で、自分の赤ん坊を水路に浸けて溺死させ、まもなく自らも自殺したのだという。この溺死させるという描写は、小説の後半に別の形で再び登場する。マリコが大事に育てていた子猫を、サチコが川に沈めて溺死させようとするのだ。マリコは以前から子猫の飼育を熱望していたが、サチコはその願いを却下し続けていた。そしていよいよアメリカ行きを実現できる間際になって、ついにサチコは娘の眼前で残酷な仕打ちを見せるのである。この行為の背景には、いつまでもアメリカ行きを拒否するマリコへのサチコの苛立ちがある。子猫は幼いマリコを象徴するものだという Brian W. Shaffer の意見¹¹に基づけば、このエピソードにはサチコの娘殺しの願望が暗示されているという解釈も可能である。ここにもやはり、娘の死を誘発したエゴイスティックなエツコとの類似性を読み取ることができるのだ。

次に、木に関して考えてみよう。作品中には子供が木から落下したり吊るされたりする描写が頻出する。マリコが川岸で倒れていた原因は、登っていた木からの落下にあった。これとは逆に、マリコが稲佐山で出会った生意気な男の子に木登りをさせ、そこから蹴落とすというエピソードも登場する。また、当時長崎では "child murders" (100) (156) が頻発していたが、この連続子供殺害事件の被害者の一人である少女は、木から吊るされた状態で発見されたという。この悲惨な出来事は、当然のことながら、ケイコの首吊り自殺を読み手に連想させる。そして、ケイコが自殺に用いた縄は、あたかもエツコの罪意識を反映するかのごとく、トラウマ的妄想を伴って様々に彼女の脳裏に去来する。重要なのは、それがマリコとの関連で語られるという点である。ケイコが死んだ後、エツコはブランコに乗った女の子の夢を見る。エツコは最初、近くの公園で見た少女が夢に現れたのかと考えていたが、後に "It was just a little girl I knew once" (95)、"I knew her a long time ago" (96) という記憶に辿り着く。これがケイコではないというエツコの主

張を額面通りに受け取るならば、この少女がマリコを指しているのは明らかである。さらに続けてエツコは、"... the little girl isn't on a swing at all. It seemed like that at first. But it's not a swing she's on" (96) という認識に至る。はっきりとは書かれていないが、エツコが夢想したのは、ブランコの揺れる動きではなく、木から縄で吊り下がって揺れる人間の姿だったことが推測される。このようにして、エツコの中では、空想上のマリコの姿と現実的なケイコの死とがオーバーラップする。

エツコの中で不吉な縄とマリコが結びつくのには、さらに重大な理由がある。エツコによる過去の回想の最終場面は、マリコとの対話で締め括られている。そこに縄に関わる内容が登場するのだが、それについて議論する前に、直前の二人のやりとりを検討してみよう。やりとりの内容は、エツコによるアメリカ行きの勧めである。この時点に至るまで、エツコはアメリカ行きに懸念こそ示しても、それをマリコ本人に向かって説得することなどなかった。直前にサチコからいよいよ長崎を立出する話を聞いていたエツコは、彼女の代弁者のごとくマリコに進言する。

"In any case," I went on, "if you don't like it over there, we can always come back."

This time she looked up at me questioningly.

"Yes I promise," I said. "If you don't like it over there, we'll come straight back. But we have to try it and see if we like it there. I'm sure we will." (173)

ここは、多くの批評家が一致して指摘しているように、エツコが、マリコではなく自分の娘ケイコに向かって語りかけているように読める箇所である。イシグロは代名詞 "we" を5回も意図的に用いることにより、本来なら "you" でなければ意味をなさない発言の誤りを際立たせている。Barry Lewisはこの箇所について、"The change of pronoun suggests a displacement of the relation between Etsuko and Keiko on to that of Sachiko and Mariko"¹² と的確な分析をしている。エツコは自分では気づかぬうちに親子関係の「置き換え」を行い、結果として、イギリス行きに際して行ったケイコへの説得の実態を暴露しているのだ。読み手はすでにエツコとサチコ、ケイコとマリコの平行関係を推測しながら読み進めてきているわけだが、この箇所に至ってその事実を明確に認識することになる。

この会話の直後に問題の縄を巡るやりとりが出てくるのだが、ここでもまた代名詞に関わる問題が浮上する事実は興味深い。¹³

The little girl was watching me closely. "Why are you holding that?" she asked.

"This? It just caught around my sandal, that's all."

"Why are you holding it?"

"I told you. It caught around my foot. What's wrong with you?" I gave a short laugh. "Why are you looking at me like that? I'm not going to hurt you." (173)

この箇所だけでは代名詞 "that" や "it" が何をなすのか不明だが、イシグロは、これと酷似した会話がかかなり以前に二人の間でなされていた、という既視感を読み手に与える仕組みを施している。少し長いが、小説の中盤に登場するその場面を引用する。

"What's that?" she asked.

"Nothing. It just tangled on to my foot when I was walking."

"What is it though?"

"Nothing, just a piece of old rope. Why are you out here?"

...

"Why have you got that?"

"I told you, it's nothing. It just caught on to my foot." I took a step closer. "Why are you doing that, Mariko?"

"Doing what?"

"You were making a strange face just now."

"I wasn't making a strange face. Why have you got the rope?"

"You were making a strange face. It was a very strange face."

"Why have you got the rope?"

I watched her for a moment. Signs of fear were appearing on her face. (83-84)

この二つ目の引用によって、一つ目の引用の「それ」が縄であるらしいことが判明するわけだが、実はこの二つの場面にはもう一つ注目したい共通点が

ある。それは、マリコがエツコの持つ縄を見て執拗に確認の質問を繰り返し、その表情がこわばる点である。一つ目の引用の直後、マリコは猜疑心を抱いた様子で ("suspiciously" (173)) エツコから逃げ出し、そこでこの少女に関するエツコのすべての回想は終了する。また、通常であれば縄など見ただけで、二つ目の引用にあるような「恐怖の兆候」が表れるはずはない。当時の連続子供殺人事件についての知識があれば別だが、マリコがそれをどこまで認識していたかは不確定である。だが、この小説はそもそもリアリズムで書かれているわけではない。重要なのは、エツコの語りによって断片的な情報を与えられている読み手が、イメージの連鎖によって様々な事象の間に因果関係を見出すことができる点である。一つ目の引用最後の「あなたを傷つけることをしない」というエツコの言葉は、やはりケイコへのメッセージとオーバーラップすると考えるのが妥当であろう。エツコはここで無意識のうちに、ケイコにイギリス行きを無理強いし、結果的に首吊り自殺に追いやったのは自分であると示唆しているのだ。

マリコとケイコを巡る同じようなエツコの記憶の錯綜をもう一つ挙げよう。それは、彼女がサチコ親子と一緒に稲佐山に遊びに出かけたときのものである。彼女たちはそこでケーブルカーに乗るが、後年それを思い出したエツコは、"Keiko was happy that day. We rode on the cable-cars" (182) と述べる。これも多くの批評家が指摘している点だが、このときケイコはエツコの胎内にいたはずなので、これは明らかにエツコの記憶違いであることがわかる。このエピソードもまた、エツコの中におけるマリコとケイコの重なり合いの事実を補完している。「あの日ケイコは幸せだった」という発言の裏には、その後転じた不幸に対する後悔が潜んでいる。その証拠に、別の箇所でもエツコはケイコについて、"I knew all along she wouldn't be happy over here [Britain] . But I decided to bring her just the same" (176) という告白をしている。ここには娘の「幸せ」を剥奪した加害者としての責任を感じるエツコの姿がある。娘は「幸せ」だった人生を喪失し、母親はその娘を喪失するという負の連鎖がここには見られるのだ。さらにもう一つ指摘すると、稲佐山のケーブルカーは、ケイコの自殺と間接的な繋がりを持つように描かれている。ケーブルカーが急斜面を登っていく際の様子を、エツコは "we were hanging in the sky" (107) と描写している。ケイコがケーブルカーに同乗していたという記憶違いを考え合わせれば、「ぶらさがっていた」という表現が彼女の自殺への連想を生じさせてもそれほど不思議ではない。実際、エツコは別の箇所で、これと類似した "my daughter hanging in her

room" (54) という表現を用いている。ケーブルカーのケーブルが、自殺に用いられた縄とイメージ的に結びつく点については、Mike Petry も同様に指摘している。¹⁴ イシグロは、かつての楽しい遠出の記憶の中に、ほんの一瞬ではあるが、死に結びつく不吉な要素を巧みに挿入しているのだ。

以上、マリコとケイコに焦点を当てて、その多岐に渡る喪失の提示手法について考察してきた。フジワラ夫人の前向きな主張とは裏腹に、子供に対するエツコやサチコの対応の仕方はきわめて後ろ向きである。むしろ、自己実現に対する前向きな母親の姿勢が、子供に対する後ろ向きな姿勢に繋がっていると書いてもいいだろう。二人に共通するのは、精神的な離反であれ、実際の死であれ、子供の生命力に負の影響を与えて、その喪失を引き起こす自己本位な母親像なのである。

IV

この小説における子供の喪失について考える際、議論すべき人物がもう一人いる。それはエツコの次女ニキである。ケイコの死後、ニキは現在離れて暮らす母のもとを訪れ、5日間を過ごす。エツコの語りは現在と過去を行き来するが、現時点の語りは、現在の母娘の関わりを綴るものである。すなわち、過去の回想によって長女喪失の経緯を間接的に追体験するエツコは、同時に、次女との現在の関係性を顕在化させる、という構図が作品には読み取れるのだ。過去の出来事と交互に語られるニキとの交流はエツコによっていかに提示されているのか、そして、ニキもまた喪失の対象となりうるのかという点について以下に考察する。

エツコは "some selfish desire not to be reminded of the past" (9) のため、次女に日本人らしからぬ名をつけたかったのだと述べる。この過去が、これまで議論してきたケイコを巡る問題を指すことは自明である。ニキの命名には、日本的な事象を忘却し、イギリスに同化したいと考えたエツコの過去の願望が投影されているのだ。この日本とイギリスに対する温度差を反映するかのようには、姉妹の関係は疎遠である。ニキはケイコの葬儀にも出席しなかったし、また、"She was never a part of our lives — not mine or Dad's anyway" (52) というニキの言葉は、イギリス人の血筋に馴染めないケイコ像を浮き彫りにする。エツコは娘たちについて、"one has become a happy, confident young woman — I have every hope for Niki's future — while the other, after becoming increasingly miserable, took her own life" (94) と明

確に対比している。ここでニキの未来に期待するエツコの言葉は重要である。ケイコの幸福を喪失させた後、エツコは次の娘に対して、新たに「前向き」な姿勢を示しているからである。この母親の期待に対し、ニキはどのように反応しているのだろうか。

ニキがエツコを訪れたのは "a sense of mission" (10) に動かされたためだと書かれている。彼女は母が過去に歩んだ独自の生き方を称賛し、その選択の正当性を主張する。そして、ケイコにはできるだけのことをしたのだから、その死に責任はないと慰める。ここには語り手エツコの自己正当化の意識が反映されており、ニキは "Etsuko's rationalizing voice"¹⁵として機能しているという解釈が可能である。だが、実のところ、ニキはエツコが期待するような生き方や人生観を抱いてはいないことが判明する。彼女には恋人はいるが、彼と結婚する意志はなく、また子供も不要だと考えている。ニキは現在エツコを残して一人ロンドンに住んでいるが、自身の生活について、"Yes, I'm happy enough" (50)、"Well, I'm quite happy there" (179) と満足感を示す。だが、結婚も子育ても眼中にない、かといって再び母親と同居する素振りも見せない彼女の「幸せ」な生き方は、エツコに内心不満を抱かせるものである。

"Don't worry, Niki," I said, with a laugh. "I wasn't insisting you became a mother just yet. I had this passing fancy just now to be a grandmother, that's all. I thought perhaps you'd oblige, but it can wait." (48)

娘に譲歩するような冗談めいた言い方ではあるが、ここに見られるのは、自分と同じように結婚し出産してくれることを願うエツコの期待の表白である。かつて自分が経験した「前向き」で「幸せ」に繋がる行為を、エツコはニキにも求めているのだ。

では、エツコの願望に対するニキの拒絶はどういう意味を持つのだろうか。ニキは、一世代前に国際結婚をして母国を飛び出した母親以上に、女性として自立した考えを持つ人物として提示されている。エツコの願望は、新世代のニキからすれば、やはり古臭く型にはまったものである。同時代の女性について、ニキは、"So many women . . . get stuck with kids and lousy husbands and they're just miserable" (89-90)、"So many women just get brainwashed. They think all there is to life is getting married and having

a load of kids" (180) と批判している。これに関して、1980年前後当時のイギリスのフェミニズムの機運を反映した言説だと解釈することは十分に可能だろう。そして、ニキのこの女性批判の矛先は、結局エツコの第二の結婚人生にも向けられていると読むことができる。つまり、ニキの目には結婚から出産へという旧来のプロセスそのものが古色蒼然としたものと映っているため、国際結婚とはいえ旧来の手続きを経たエツコを選択そのものが「後ろ向き」なものに映っているのだ。ニキがかつてのエツコの先進的な選択を認めているのは事実だとしても、それはやはり旧態依然とした枠組みを出るものではなく、ニキはそれよりさらに先進的な生き方を「前向き」に希求しようとしているのだ。

さらに言えば、ニキの批判の背後には、自身が目の当たりにしてきた姉ケイコの不幸な人生に対する意識が作用しているのではないかと考えられる。ニキはエツコの責任を問うたり生き方を批判したりする態度こそ見せないものの、長女を喪失した母親に対し、彼女がやや距離を置いて冷静に見つめている姿勢がところどころに見受けられる。結婚も子供も不要だと主張するニキは、初めからそれらに伴う喪失の可能性を拒絶しているとも解釈できるだろう。それは彼女なりの自己防衛本能と言えるかもしれない。母親に対するニキの弁護や正当化は、エツコにとって罪悪感を軽減してくれる福音のようにも思えるが、実際のところ娘はまったく異なる方向の人生を見据えているのだ。これらの点を考慮すれば、ニキが淡々とした調子でロンドンに戻っていく小説最後の場面は、母親との精神的な離反を示唆する象徴的な場面だと捉えることが可能である。ロンドンへの出立を告げるニキに対するエツコの言葉、"It's very important you lead your own life now" (177) は、そのことを暗示している。そしてこの離反はエツコにとって新たな喪失を意味することになる。ケイコの場合とは異なるパターンで、エツコはニキを喪失する可能性が最後に示唆されていると解釈できるのだ。このように考えれば、独自の自己実現を求めたエツコの人生の選択は、姉妹双方の喪失と直接間接的に結びついていると言えよう。

結

以上、戦後と現代それぞれにおいて自らの生き方を模索する女性像、ならびに彼女たちを巡る諸々の喪失のプロセスやその意味について、主人公エツコを中心に考察してきた。エツコの人生の選択は罪深いものであり、それは

取り返しよのない喪失を伴うものであった。だが、イシグロはエツコのことを正面から糾弾するような描き方はしていない。イシグロのこうした姿勢の意味について最後に考えてみたい。エツコの分身がサチコであることはこれまで議論した通りだが、エツコの生き方を検証する上で参照すべきもう一人の副次的人物として義父のオガタさんがいる。オガタさんは、戦前戦中に愛国主義的偏向教育を行い、戦後になって周囲からの批判の対象となる。彼を雑誌上で弾劾した後輩の教師 Shigeo Matsuda は、本人に対して、"I don't doubt you were sincere and hard working. I've never questioned that for one moment. But it just so happens that your energies were spent in a misguided direction, an evil direction" (147) と諭すように述べる。ここに要約された、誠実に努力はしたものの、その方向性が間違っていて良からぬ結果を生んだという人生のプロセスは、そのままエツコにも当てはまるものであろう。エツコは自己実現のために自ら願う生き方を選択したが、それは娘の人生を犠牲にし、その喪失を引き起こすこととなった。その結果のみに目を向ければ、彼女の罪は非難されてしかるべきである。しかし、彼女の努力は当時の自身の内なる意思に真剣に向き合っただけであり、そのこと自体について批判的に描くような書き方を作者はしていない。むしろ、イシグロはそこに人間の弱さや人生の悲哀を認め、同情を抱きつつ描いているかのようにすら思える。戦前戦中に愛国的プロパガンダに傾倒したオガタさんの人物像は、次作 *An Artist of the Floating World* の戦争画家 Masuji Ono にそのまま投影されている。また、誠実な努力の末に道を誤るという哀感に満ちたこの人物像は、第三作 *The Remains of the Day* において、ナチス・ドイツに加担してしまった主人に仕える忠実な執事 Stevens にも継承されている。いずれも、その行為自体は非難に値しようが、人生に対する盲目なほどひたむきな姿勢が、読み手の中に強い印象とある種の共感を生む人物たちである。エツコは、社会に影響を及ぼすような、あるいはそれに寄与するような地位の人間とは異なるものの、イシグロ作品に特徴的に登場するこれらの人物像の先駆けとなる資質を備えていると言えよう。イシグロは、そうした人間が陥りがちな人生の過ちを丹念に描き出し、人間存在のあり方について真摯に問い続ける作家なのである。

注

1. Dylan Otto Krider, "Rooted in a Small Place: An Interview with Kazuo Ishiguro," *Kenyon Review* 20.2 (1998): 150.
2. Christopher Bigsby, "In Conversation with Kazuo Ishiguro," *Conversations with Kazuo Ishiguro*, ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong (Jackson: UP of Mississippi, 2008) 24.
3. Brian W. Shaffer, *Understanding Kazuo Ishiguro* (Columbia: U of South Carolina P, 1998) 17.
4. Bigsby 20.
5. Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills* (1991; London: Faber, 1982) 11.
以下の引用はすべてこの版に拠り、本文中に頁数のみを記す。
6. Yu-Cheng Lee, "Reinventing the Past in Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills*," *Chang Gung Journal of Humanities and Social Sciences* 1.1 (2008): 26.
7. Gregory Mason, "An Interview with Kazuo Ishiguro," *Conversations with Kazuo Ishiguro*, ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong (Jackson: UP of Mississippi, 2008) 5.
8. Cynthia F. Wong, *Kazuo Ishiguro*, 2nd ed. (Tavistock: Northcote, 2005) 32.
9. Mason 6.
10. Mason 5.
11. Shaffer 32.
12. Barry Lewis, *Kazuo Ishiguro* (Manchester: Manchester UP, 2000) 34.
13. 長柄裕美, 「現実と追憶の揺らぎのなかで—カズオ・イシグロ *A Pale View of Hills* 試論—」, 『鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学』 3.2 (2002): 138-39.
14. Mike Petry, *Narratives of Memory and Identity: The Novels of Kazuo Ishiguro* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999) 38.
15. Shaffer 25.